



# 教員が研究の楽しさを語る

第176回(11/28)秋葉 剛史先生推薦

## ブックガイド



※掲載されている本はL棟2階 あかりんアワーのコーナーに配架されます。

### Book1

#### 現代形而上学：分析哲学が問う、人・因果・存在の謎(ワードマップ)

著者：鈴木生郎, 秋葉剛史, 谷川卓, 倉田剛

出版：新曜社, 2014.2

コメント：この実在世界は全体としてどんなものであり、そのなかで私たち人間はどんな位置を占めるのか——いかにも「哲学」という感じのするこうした問いにストレートに取り組もうとするのが「形而上学」という分野です。本書は、その形而上学の現代の展開を初学者にもわかりやすく伝えることをねらいとしています。人の同一性、自由、因果、可能性、個物と普遍、などの多様なテーマが扱われているので、面白いと感じられるテーマがだれでも一つくらいは見つかるかもしれません。



### Book2

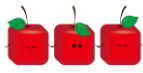
#### 「子ども」のための哲学

著者：永井均著

出版：講談社, 1996.5 (講談社現代新書, 1301)

コメント：哲学は「学ぶ」ものであるというよりもまず「する」ものだ、という著者のメッセージがよく伝わってくる快作です。「なぜぼくは存在するのか」、「なぜ悪いことをしてはいけないのか」という、著者が子どものころに抱いた二つの疑問についての思考の過程が、みずみずしい筆致で描き出されています。同じ著者の『私・今・そして神』(講談社、2004)もおすすめ。





### Book3

## 新哲学対話：ソクラテスならどう考える？

著者：飯田隆著

出版：筑摩書房, 2017.11

コメント：哲学の祖と言われるプラトンは、その著作を、何人かの登場人物による「対話」という形式で書きました。飯田氏による本書は、この対話という形式がもつ魅力を存分に引き出すかたちで、価値の客観性、人工知能、言葉の意味と経験、知識、という四つのテーマについて綿密に議論しています。現代哲学の成果をふまえて書かれてはいますが、前提知識はほとんど必要なく、何よりも読み物として面白い本です。この機会にプラトン本人の著作にも触れてみれば、さらに楽しさは増すかもしれません。

